

国際教育センター長 殿

To Director, Center for Global Education and Exchange

ストラスブール大学への短期訪問研究員報告書
Research Report by Visiting Researcher to University of Strasbourg

氏名 Name	中挾知延子
所属・職名（身分） Affiliation and position	国際観光学部国際観光学科・教授
研究課題名 Research topic	アルザスのクロスボーダーツーリズム
研究期間 Research period	2025 年 4 月 24 日 ～ 2025 年 5 月 11 日 From Y/M/D to Y/M/D
研究協力教員氏名（所属） Research partner (affiliation)	Thierry BURGER-HELMCHEN (Faculty of Economics and Management Sciences)
実施講義①専門家向け （日時・テーマ・概要） ① Specialized Lecture (Date, Theme, Overview)	April 29 2025 フランス語で講演 Title: Pèlerinage aux temples de Chichibu, à l'ère numérique contemporaine 「デジタル時代の秩父 34 札所巡礼ツーリズム」 Summary: Les 34 temples de pèlerinage de Chichibu sont dédiés au bodhisattva Kannon, la déesse de la Miséricorde, très populaire au Japon. Le pèlerinage de Chichibu a vu le jour au XIIIe siècle et perdure encore aujourd'hui. Durant l'époque d'Edo, entre 1603 et 1867, Chichibu était un lieu très fréquenté par de nombreux habitants d'Edo, venus se recueillir à la foi Kannon. Aujourd'hui, des efforts sont déployés pour utiliser la gamification afin de s'adapter à l'ère numérique et de rendre le pèlerinage de Chichibu attractif pour les touristes de toutes générations. Nous voudrions discuter les raisons qui rendent le pèlerinage contemporain durable à Chichibu, au nord-ouest de la préfecture de Saitama, au nord de Tokyo. https://mufrancejapon.unistra.fr/events/pelerinage-aux-temples-de-chichibu-a-lere-numerique-contemporaine/
実施講義②一般向け （日時・テーマ・概要） ② General Lecture (Date, Theme, Overview)	ストラスブール大学の都合で①の 1 回しか実施できず、受入担当教授も承認済。尚、①のセミナーには専門家及び一般の方両方にご参加いただいた。
研究成果 research achievements	A4 用紙 2 ページ以上 申請時に提出した内容を踏まえ、ご記入ください。

ストラスブール大学短期訪問における研究報告 「アルザス地域圏のクロスボーダーツーリズム」

国際観光学部国際観光学科・教授
中挾知延子

1. はじめに

渡航前には研究タイトルを「アルザスのエスニックツーリズム」として、アルザスの民族（エスニック）アイデンティティに根差したツーリズムを探究する予定であった。しかし、現地に着いてストラスブール大学での受入教授と打合せをしたところ、フランスでのエスニックツーリズムは主にアラブ諸国やアフリカなど西欧世界の周辺地域のイベントや観光資源を指し、筆者の想定していたコンセプトと異なることが分かった。参考までに、英国のウェールズ人がイングランドの内部植民地として歩んできた苦難の歴史を経て、ウェールズ人の民族アイデンティティを体現化したツーリズムの研究（Pitchford, 1995）があることは述べておきたい。アルザス地方は 17 世紀にフランス国王ルイ 14 世がフランス領として以来、1871 年の普仏戦争でプロシアに、1919 年第 1 次世界大戦後フランスに戻り、1940 年ナチスにより再びドイツに、そして 1944 年フランスに返還という近代の歴史の流れに翻弄されてきた土地である。そのような歴史の流れでアルザス人の民族アイデンティティは却って揺るぎないものになったという様が、ウェールズ人の民族アイデンティティに通じるものがあると考え、エスニックという用語を使ったが、フランスでは異なるコンセプトを持つものであった。

ドイツとスイスに接して、フランスの国境に位置するアルザス地方は、経済から生活文化に至るまで、有史以来ライン川の恩恵を受けて発展してきたといっても過言ではない。現在は **Grand Est** 地域圏（グラン・テスト：大いなる東の地域圏という意味）と呼ばれているが、アルザスという名称は地域圏のあらゆる場所に浸透している。文献調査をしていくと、アルザス地方では、クロスボーダーツーリズム（Cross-border Tourism: CB）という国境での交流を促進するツーリズムが、アルザス地方政府の 2024 年から 28 年までの観光戦略のひとつとしてあげられていることが分かった¹。この CB ツーリズムが筆者の研究したいコンセプトであることと認識して研究調査を行うことにした。滞在期間中はストラスブール大学での文献調査と国境地帯での現地調査を行った。

2. クロスボーダーツーリズム（CB ツーリズム、フランス語：Tourisme transfrontalier）

CB ツーリズムについては、一言でいえば「余暇・文化交流・ビジネスのために国境を往来するツーリズム」である。Borderland Studies という国際ジャーナルの中にも、観光学に焦点をあてた CB ツーリズムの論文が多く掲載されている（参考文献は省略）。日本では

¹ <https://www.alsace.eu/actualites/strategie-tourisme-alsace-2024-2028/>

「ボーダーツーリズム協議会」という組織 (<https://www.border-tourism.com/>) がある。今回は、アルザス地方と国境をライン川で接しており、国境を橋で容易に往来できる地域の観光開発という観点から調査を行った。

20 世紀は戦争の世紀といわれ、20 世紀後半まで国境地帯のイメージといえば、軍隊が駐留して他国からの侵入を警備している物騒な景色や、草が鬱蒼と生い茂る暗鬱な雰囲気が主流で、一般人は足を踏み入れず、観光はおろか地域住民の憩いの空間というイメージは想像もつかなかったといえる。ところが 20 世紀終盤から 21 世紀に入ると、社会の変化に伴って国境周辺の状況も変わってきた。欧州では EU が成立し、EU 域内はパスポートやビザなしで自由に往来できるようになった。今回調査したフランス・スイス・ドイツの 3 カ国も例外ではない。スイスは EU に加盟していないが、シェンゲン協定により自由な往来が可能になっている。CB ツーリズムのメリットは、国境を接する国々が歩んで来た歴史・文化・景観を共有し、国境を接する地域が経済はもとより文化交流や地域間協力を育んでいけることである（例えば Garloch, 1946）。さらに国境地帯が人々にとって余暇を楽しむ憩いの空間になることで、新たな観光文化の創出の可能性も考えられる。一方で CB がもたらす問題点は、今まで人がまばらであった国境地帯であるからこそ手つかずの豊かな生物多様性が残っていたが、開発によって人が立ち入ることで、ゴミなどの廃棄物や施設設営のための草木の伐採などで生物多様性が損なわれていくという懸念である。

さらに、国境地帯という互いの文化が隣り合う場所において、文化接触による不都合な状況は生まれないのかも観察すべきである。観光と環境の共生は、都市開発だけにとどまらず、地域文化の持続可能性も視野に入れた文化人類学や民俗学ともオーバーラップする観光学の興味深い分野の一つといえる。



図 1 ストラスブール（引用元：<https://cdn.britannica.com/41/114341-050-955838F0/Strasbourg-France.jpg>）

3. 3Land プロジェクト～フランス・ドイツ・スイスの国境における観光開発

繰り返しになるが、フランスは、ストラスブールがあるアルザス地方で、東をドイツ、南をスイスと国境を接している（図 1）。2011 年以来これら 3 カ国の国境地帯に位置する 3 つの町、ユナング（Huningue：フランス）、バーゼル（Basel：スイス）、ヴァイル・アム・ライン（Weil am Rhein：ドイツ）は「3Land（ドライランド）プロジェクト：3 つの町～1 つの未来」を掲げて、国境をまたぐ都市開発を進めている（<https://3-land.net/en/>）。プロジェクトでは、3 カ国間の仕事に従事する住民の往来をはじめ、サイクリングロードや公園など地元住民や訪問客が余暇を楽しめる公共スペースの開発に力を入れている。筆者は 3Land プロジェクトにおける CB ツーリズムの現状を把握するため、滞在期間中複数回にわたり 3 カ国の国境地帯を視察した。



図 2 3Land（ドライランド）プロジェクトの国境地帯

地図データ©2025 Google, GeoBasis-DE/BKG (©2009) に一部地名「バーゼル」を追加

● バーゼルからドライレンダーエックへ

ストラスブール中央駅から TER (Transport express régional：フランスの地域圏急行鉄道) に乗って 1 時間くらいでスイスのバーゼルに着いた。バーゼル中央駅前からトラム 8 号線に乗り、Kleinhüningen 停留所で降りた。8 号線は途中で国境を越えてドイツのヴァイル・アム・ラインの町に入るが、この停留所はその一手手前のスイスにある。そこから歩いてライン川岸まで 10 分ほどで到着し、川岸に沿って 2 人並んで辛うじて歩ける歩道（写真 1）をさらに 5 分くらい歩くと道幅は少し広くなった。川岸に数隻のクルーズ船が停泊し、道路側には乗船客のバス停や船を待つ間にくつろぐためのレストランなどがあつた。川岸の突き当りにはドライレンダーエック (Dreiländereck) と称する尖塔（写真 2）がそびえている（図 2 の中央部）。この尖塔は、写真 3 にあるように 3 面でできており、フランス・

ドイツ・スイスの国旗が各面に描かれ、3Land プロジェクトのシンボルになっている。尖塔からライン川を眺めると、写真 4 の右端にライン川に架かるアーチ橋が見える。この橋はフランスとドイツの国境に架かる歩道橋になっている。

スイスからライン川岸に沿った道は、遊歩道というには狭く、人もまばらで、歩いていたときも犬の散歩をさせる数人の近隣住民と行き違ったのみであった。途中からクルーズ船が横付けされている場所に来ると道幅は広くなるが、クルーズ船の客か、尖塔を見に来る人々に限られていると思われる。乗船客がたまたま尖塔を見つけて集まっているのかもしれない。印象として、人々が憩う空間とはイメージが異なっていた。視察後バーゼル中央駅までトラムに乗って同じ経路で戻り、TER でストラスブールまで帰った。



写真 1 川岸の狭い小道（筆者撮影）



写真 2 ドライレンダーエック（筆者撮影）



写真 3 ドライレンダーエックの 3 か
国の国旗（筆者撮影）



写真 4 ドライレンダーエックから臨むライン川と右遠方に見えるもう
1 つのアーチ橋（筆者撮影）

● サン・ルイからユナング〜ヴァイル・アム・ライン

フランスからドイツの国境を渡って、ドライレンダーエックの向こうにある三カ国橋 (Le passerelle des Trois Pays) を視察に行った。別の日にドライレンダーエックに行ったときはスイスからドイツに向かう道程であったが、この日はドライレンダーエックの反対側から国境地帯を目指す道程になる (図 2 の「三カ国橋」)。ストラスブールから TER で南下し、国境近くの町サン・ルイ (Saint Louis) の駅で降りた。そこからタクシーを使って、サン・ルイの隣町でドイツ・スイスとライン川で国境を分かち合っている町ユナング (Huningue) に着いた。タクシーを降りて 10 分ほど歩き三カ国橋に向かう途中では、町のメインストリートに 3 カ国の国旗と EU、町の紋章をかたどった旗が揺らめき、国境の町を印象づけていた (写真 5)。

橋のたもとは遊歩道や緑地が整備されている (写真 6)。橋を歩いてライン川を渡り、ドライレンダーエックを右遠方に見ながら国境を越えてドイツの町ヴァイル・アム・ラインに着いた (写真 7, 8, 9, 10)。ドイツ側には『3LAND』の開発状況を示す地図もあった (写真 11)。ここからトラム 8 号線で国境を越えてバーゼル中央駅まで行くと、そこからライン川を来た方向の反対回りでフランスへ帰ることができるが、今回は橋を再び渡ってユナングに引き返した。ドライレンダーエックの周辺は広い遊歩道などなく、クルーズ船の発着所が目立っていたが、三カ国橋は徒歩か自転車で渡ることができ、橋の兩岸には緑の遊歩道が広がっていた。ドイツ側の川岸にはレストランもあり、地元住民や観光客に憩いの空間が提供されていると感じた。帰りは徒歩で 50 分くらいかけてサン・ルイ駅に到着し、TER でストラスブールまで帰った。ライン川岸は先日行ったドライレンダーエックとは異なる風景であり、三カ国橋を渡る川岸の方が、格段に緑地開発が進み、公園が整備されて散歩やサイクリングを楽しめる空間になっていた。



写真 5 国境の町ユナング (筆者撮影)



写真 6 三カ国橋のフランス側の川岸 (筆者撮影)



写真 7 三カ国橋上
(筆者撮影)



写真 8 三カ国橋から臨むライン川と中央遠方に見えるドライレンダーエック
(パノラマで筆者撮影)



写真 9 三カ国橋のドイツ側の川岸
(筆者撮影)



写真 10 ドイツ側の川岸に広がる緑
地 (筆者撮影)



写真 11 『3LAND』の緑地開発地
図 (筆者撮影)

4. ストラスブールとケール～フランス・ドイツの国境における観光開発

今回の調査のもう一つの場所は、ストラスブールとドイツの町ケールでの、フランスとドイツの国境地帯である。以前はこの地帯は路線バスしかなかったが、現在はトラムが 7 分おきくらいに走りとても便利になっている (写真 12)。トラムに乗ってドイツとの国境の停留所 Port du Rhin で降りる。停留所から橋にたどり着くまで、緑豊かな公園が整備され (写真 13)、さらに現在開発工事中的の場所もあった。そこから車道の脇に歩道がある橋 (通称ヨーロッパ橋) を渡ってドイツ国境の町ケールに着いた。ドイツ側の川岸もストラスブール側と同様に緑地が整備された公園が広がり、ジョギングやウォーキング、犬の散歩をさせる人など、非常に多くはないが一定の人数の人たちがいた (写真 14)。公園を歩いて少し向こうの、ヨーロッパ橋と並行している歩行者専用の橋 (Passerelle des Deux Rives : フランス語で川の兩岸をつなぐ橋、設計者の名前を取ってミムラムの歩道橋ともいわれる) (写真 15) を渡ってストラスブールに戻った。そこからトラムの停留所まで少し離れているが、一帯は広い公園が続いており、乗馬場が併設されていた。乗馬場では乗馬教室が行われていたが、

受講者のみの施設ではなく、掛かっている看板からレジャーで誰でも使えるようであった（写真 16）。ストラスブールとケールの国境地帯の開発について、ドイツ側にあったライン川沿いの開発計画の図を示す（写真 17）。



写真 12 フランスの国境のトラム停留所「Port du Rhin（直訳すると「ライン港」）」（筆者撮影）



写真 13 フランス側の川岸の公園（筆者撮影）



写真 14 ドイツ側の川岸の緑地と遊歩道（著者撮影）



写真 15 フランスとドイツを結ぶミムラムの歩道橋（筆者撮影）



写真 16 フランス側の乗馬場（筆者撮影）



写真 17 ライン川沿いの開発地図（筆者撮影）

5. おわりに

現地調査から、ストラスブールとケール間の利便性は以前よりも向上し、ライン川兩岸の憩いの空間の開発が進んでいるという印象を受けた。また、もう一つの視察で訪れたフランス・ドイツ・スイスの 3LAND と比べて特筆すべき点は、兩岸がトラムで結ばれて往来が格段に楽なことであった。3LAND のほうは、フランス側のユナングからライン川岸に行くまで少し労力を要する。サン・ルイ駅からバスが出ているが、バスの乗換が必要で初めての訪問者にはハードルが高い。自動車や自転車があれば問題ないが、自転車は高齢者や小さな子供連れでは困難であろう。しかしながら、3つの国という、2国間だけではないスケールの大きさが訪問者にはある種の醍醐味を感じると思われる。

今回調査した国境地帯では、すでに 3 カ国の研究者の研究プロジェクトも行われている。観光と環境（生物多様性）との共生がメインテーマになっているが、別の観点として、国境地帯で人々が余暇を楽しむ憩いの空間になることで、新たな「観光文化」の創出の可能性を探ることについて述べておきたい。現場では緑地の開発を目の当たりにしたが、文化交流については、約 2 週間という短い滞在期間であったことが原因かもしれないが見つけることができなかった。例えば、国境地帯の公園での文化イベントやフェスなどの開催はあるだろうか。これからすべきこととして、人の往来についての詳しい数値データの収集や、利用者へのアンケート、開発プロジェクト主体へのインタビューなどがあげられる。

観光文化とは、観光によって生み出される文化や交流であり、観光によって地域が変化し、新たな価値観や習慣が生まれることを意味する。今まで国境は国々間の通過点に過ぎなかったが、誰もが余暇を楽しめる憩いの空間という新たな価値が追加されたのがクロスボーダーツーリズムの魅力といえる。今後国境の憩いの空間が豊かな観光文化を生み出して、持続可能に人々の生活を文化面で向上させる推進力になるのかどうか、アルザス地方でのケーススタディを取り入れて研究を進めていきたい。

謝辞

今回の短期派遣を受け入れてくださったストラスブール大学経済学部の **Thierry Burger-Helmchen** 教授に多大な感謝を申し上げます。また、以前 1 年間交換研究員でお世話になった同大学地理学部の先生方にも再会でき、研究のための多くの有用な情報をいただき大変ありがとうございました。当時の受入教授で現在は引退されている **Christiane Weber** 先生にも再会し、今後の研究のためのコンタクトパーソンを紹介いただいたのは望外の喜びでした。そして、日仏大学会館の中谷陽一教授、**Michèle Forté** 館長、**Caroline Blatz** 氏、日本学術振興会ストラスブール研究連絡センターの高木敏行センター長とセンター職員の方々には、公開セミナーで講演の機会を与えてくださりありがとうございました。最後に今回の短期訪問研究員派遣の機会を与えてくださった東洋大学国際教育センターに心より御礼を申し上げます。

参考文献

- Garloch, L. A. (1946). Alsace-Lorraine: A Border Problem. *Journal of Geography*, 45(7), 268–279. <https://doi.org/10.1080/00221344608986561>.
- Pitchford, S. R. (1995). Ethnic tourism and nationalism in Wales. *Annals of tourism research*, 22(1), 35-52.

